

わがむらの昔ばなし

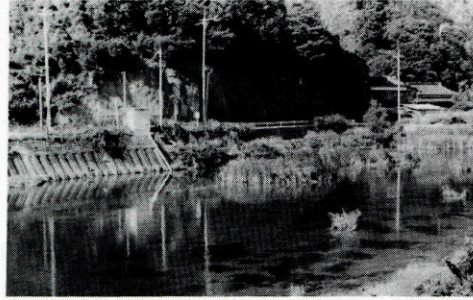
昔話四題

。しだいだか

昔、東方川(三隅川の下流)のとうかん淵のあたりは淋しい所で、しだいだかが出てきて、通る人びとをびっくりさせていたということである。雨のしよぼしよぼ降る暗い晩などには、川べりを通っていると、突然提灯のほの暗いあかりの中に、大入道の坊主がぬっと前に立ちほだかる。あっと驚いて見上げると、その大入道はすっと更に高く伸び上げてゆく。またびっくりして見上げると、更に高く背が伸び上る。こうしてどんどん大入道は大きくなって、おしまいにはどぼんと川の中にとびこんでしまつので、出あった人たちは腰を抜かしたというのである。

この大入道は、実はこの辺りにすんでいたかわうそが、一匹の背中に次の一匹が乗り、更にその背に次のが乗って、しだいに高くなって大入道に化けていたのであった。

それでしだいだか(次第高)の化け物と呼ばれたとのことである。



▲ 大入道が出ていたというとうかん淵

。ぐひんさま

昔、辻並の人が山に入って木炭を焼くために、木を切っていた。するとぐひんさま(物凄い音をたてて空中を飛んでいく天狗のようなもの)がやって来て、「相撲をとろうや」と言うので、一緒に相撲をとって遊んだ。そのため、仕事はほとんど家に帰って来

た。翌日山に行ってみると、炭焼きの木はすっかりきれいに切ってあったということである。

。えんこ(猿猴(河童))

昔、辻並の川の淵に牛をつけて行って、きれいに洗ってやっていると、えんこが出てきて、牛のしっぽをしっかきその手に巻きつけ、水中に牛を引きずりこもうとした。牛はびっくりして土手に駆け上ろうとした。えんこも一生けんめい水の中に引っ張りこもうとして力競べになったが牛の力の方が強くて、余りにしっかきと牛のしっぽを手に巻きつけていたえんこは、手を放すことができないうで、土手の上まで引っ張り上げられたというのである。

えんこは余り大きな身体つきではなく、頭の上の皿の中に水があって、水がなくなるとう力がなくなるか、死ぬとか言われ、左右の手が片方が長く伸びると片方が短くなる。

町民文芸

俳句

清風句会

(九月)

風かわる瓢四・五個を垂らし住む
田村 九重

初恋のキッスシーンや夏の海
大深 八重

峠道芒穂ばらみ天をさす
岩本さつき

青芒夕べにほく紅穂かな
山中 重女

帛を裂く琴の流れや秋の声
岡 松円

ローカル線す、き追ひく一人旅
宮永ミネ子

秋の美称道路公園石光る
山崎 菊女

花すすき繚乱風のもつれ解く
笹見 梅雪

地に着きてみのむし方向失ひぬ
因藤 兔史

選者 追吟
永田 石山

長門路に昔俣ばせ千代の滝

短歌

三隅短歌会

(九月)

せせらぎにふんはり来れり石路
を揺り落ちゆく峽もみじ葉は
石村 栄助

萩往還の大屋の森に刑死せる乙
女のあはれ石佛の菊
伊藤 一郎

するすると紙幣を呑める自販機
は故郷までの切符はきだす
岡 松子

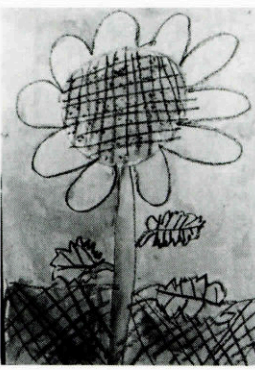
月影をながむる人のたのしみに
今宵もうれし影をみつめる
田中 朝子

地蔵盆小路に並ぶ提灯を数えつ
つ行けばこおろぎの鳴く
田中 信江

電柱にから鳥の巢見えがくれ佐
賀の平野をバスに揺れゆく
平川 育子

足しげく水守りゆきし嬬居て稲
穂は日々に充ちて垂りゆく
堀 光太郎

さわさわとゆらぐ穂波にさし入
りて月きやかに今宵牙ゆく



ひまわり



田中美和ちゃん(5歳)

豊原